

からレベルまで達していない英語学習者も多いはずですが、少なくともこのような知識は教わらなくても、豊富なインプットに触れることにより習得できるわけですが、
 けれども、実際に外国語の上級学習者を観察してみると、やはり習得しない部分もたくさんあります。ですから、どの部分は教わらなければならぬか、どの部分は教わらなくてもインプットで身につくのか、といった問題を第二言語習得研究が解明していかなくてはなりません。

今後の研究課題

最後に、より効果的な第二言語学習法を明らかにするために、今後、第二言語習得研究が明らかにしなければならない研究課題をいくつかとりあげてみましょう。

単純化されたインプットの功罪

インプットを理解することが言語習得を進めるのであれば、理解できないものを聞いていてもあまり効果はありません。理解しやすいインプットを与えるために、外国語の教師は、簡単なことばで話そうとします。ふつうの日本人も、外国人に対してしゃべるときには、日本人に話すときよりも単純化された表現(フオリナリー・トーク)とよばれ

ます)を使う傾向があることがわかっています。学習者どうしの会話もそうです。これは基本的には理解につながるのよいことですが、単純化されたインプットだけでは、習得に必要な言語材料が奪われてしまうのではないかと、という懸念があります。しかし、この点についても研究はほとんどありません。

概して外国語の先生は、単純なインプットを学習者にと与えようとする傾向があるので、これと逆のことをしたほうがよいとする「投射モデル」という説もあります。この説を主張しているのはカナダ、カルトン大学のヘルムット・ゾレル(Helmut Zöfel)やウイリスコンシン大学のフレッド・エックマン(Fred Eckman)ですが、たとえば関係代名詞を教えるときに、難しい関係代名詞の用法を教えれば、簡単な関係代名詞の用法も習得される、つまり「投射」されるというデータを示しています。さらに、ゾレルは、英語では女性形の人称代名詞(she)を教えれば、男性形(his/him)の習得にも効果があるという研究結果を報告しています。

日本語の例をあげると、「している」には、結果状態の意味(例：落ちている)と進行の意味(例：走っている)があり、多くの日本語教師は結果状態の方が進行よりも難しいということを感じています。すると、より難しいと思われる「している」の結果状態の意味さえ教えれば、進行の意味はほとんど教えなくても身につけてしまうかもしれません。

効果的な文法教育とは

先ほどもたとおり、文法項目に関しては、発達の順番が決まっ
ていない場合には教えるも無駄な「発達の項目」と、そのような制限はなく、教えれば
すぐに身につく「変異的項目」の区分があります。これもかなり単純化した話で、実際
にはこの二つに画然と分かれるわけではないのですが、このような観点は必要です。
まず、どのような項目を教えたなら効果的で、どのような項目は教えてもあまり効果がな
いか、という問題について、研究を進める必要があるでしょう。
ただし、文法教育に過度の期待をするのはまずいでしょう。文法教育についてクラシ
ンは次のような警告をしています。「ある言語の文法に関して、言語学者が明らかに

できた部分というのは、その言語の文法の一部にすぎない。そして、第二言語教師が知
っている文法はさらにその一部であり、教える身につき部分はさらにその一部にすぎな
い。ですから、文法教育の限界を意識しておくことは重要です。
文法教育はどの程度効果があるかよくわからない、という点に関して、マギル大学
のリチャード・ホワイト(Richard White)らの実験を紹介します。ホワイトは、フランス語
話者に対して、二週間にわたり、七時間かけて英語の文法項目に関してさまざまな方法
で教えました。
一つのグループは、疑問文のつくり方を教わり、もう一つのグループは、副詞をどの
位置に置くかについて教わりました。その結果、直後のテストではどちらのグループに
も教授の効果がみられましたし、疑問文に関しては効果が半年経っても続いていました。
ところが、副詞の位置に関しては、長期的には、その効果がまったく消えてしまっ
たのです。つまり、それだけ何時間かけて、徹底的に練習させても、長期的にはその効果
が、一方については消えてしまったのです。

ですから、いったい文法教育はこの程度効果があるのか、実際にどういふふうによれ
ば効果があるのか、という問題を、今後もさらに研究していく必要があるでしょう。外
国語を教える教師は一文法を教える必要を身にづくといふのは短絡的ではな

効果的な第二言語教育・学習に向けて

いいかもしれません。文法教育は基本的なものに絞る、というのが現実的な選択でしょう。

最後に一つ指摘しておきたいのは、第二言語習得研究と第二言語教育・教授法との関係です。第二言語習得研究は、第二言語教育との関係から生まれた、という歴史的な背景があります。そのため、第二言語習得の研究者は、初期の段階ではつねに第二言語教育というものを視野に入れて研究していましたが、その後、基礎研究と応用研究に分化していきます。

基礎研究のほうに力を入れるのも非常に大事なことです。簡単にいえば、第二言語習得のメカニズムを明らかにするのが基礎研究です。そのメカニズムを明らかにすることが役に立つか役に立たないか、という実用面はとりあえず問題にしません。一方、教育に直接役立つ応用研究を行う研究者も多数おり、研究の方向の二極分化が進む傾向にあります。基礎研究の中でもっとも極端なものが、いわゆるチョムスキー派の言語学、生成文法にもどった第二言語習得研究です。一方、それとは別の流れとして、教室での学習プロセスなどにもっと重点を置いた研究もあります。

ただし、この二分法はそんなにはつきりしたものではありません。たとえば、教授過程に焦点をおいて行われている研究は、「こういうふうにはっきりしたものであれば、教授過程にどのようなことを明らかにする面が強いので、応用的研究といえるかもしれません。けれども、そういった研究も「どういうフレイトバックをしたら、学習者の第二言語習得が進むか」というような基礎的な研究課題、つまり、第二言語習得のメカニズムを明らかにすることを同時に目標にしているわけですね。基礎的研究と応用的研究の両方が大事なことと、しかもその両方の区別はあまり画然としたものではないというふう

に考えておくことが重要でしょう。

第一言語習得研究は、学習者側の習得原理を明らかにします。しかし、実際にあま

使われない言語現象を教えるのも効率が悪いですし、どのような誤りを犯すと学習者にとって危険か(たとえば、日本語なら、他人を呼び捨てにする、など)といった、言語使用に関する事実も重要な情報です。そのような目標言語に関する情報は広義の応用言語学の守備範囲ですが、そういった情報と、第二言語習得研究でわかっていた学習者側の習得原理を絡めて、何をどう教えたほうが、より効率が上がるか、より効率よく伝達能力が身につくか、総合的に考えたうえで、教える内容や教授法を考えていくことが重要でしょう。

本書の冒頭でなぜ日本人は英語ができないか、について考えてみました。日本語は

付録 知っておきたい外国語学習のコツ

◎インプット

- ・インプットを理解するには背景知識が重要になる。よって、自分で学習教材を選ぶときには、自分の興味分野でよく知っている内容を、読んだり聞いたりするとよい。自分の専門分野(たとえば、国際経済とか、興味分野)たとえば、リスニング、音速などに ついて、徹底的に読んだり、聞いたりする。そうすると、外国語能力の足りないところは推測でき、しかも推測することにより知らない単語が習得される。その分野の単語がどんどん増えるのでさらに理解度が高まり、その分野ならかなりのレベルで対応できるようになる。これで、コアの語学力が身につく。あとは、別の分野に慣れればよい(主に単語と背景知識を増やせばよい)。
- ・リスニングは、聞いても二〇パーセントしかわからないような教材を聞くより、八〇パーセント以上わかる教材を何度も聞いたほうがよい。
- ・リスニング教材は、スクリーン(音声)を文字化したもの(があれば、聞き取れないところ)

英語と違う、日本人には英語は必要ない、という理由で日本人の英語下手を正当化するのではなく、第二言語習得をはじめとする言語科学による知見をできるだけ生かして、今後の英語教育のあり方を考えていく必要があるでしょう。